



端午の節句(こどもの日、菖蒲の節句)



5月5日は端午の節句です。この日は五節句の一つで、男子の健やかな成長を祝い、祈る日とされています。端午の節句にちなみ、5月5日は国民の祝日「こどもの日」であり、「菖蒲の節句」と呼ばれることもあります。

端午の節句の歴史

「端午」とは月初め(=端)の午(うま)の日のことです。元々は「毎月最初の午の日」に行われていましたが、後に「午」は「五」と音が同じことから毎月5日とされました。中国では陰暦の5月が物忌みの「悪月」とされ、さらに5が重なる5月5日は重五(ちようご)と呼ばれ、病気や災厄を祓う節句とされ、「端午の節句」と呼ばれるようになりました。

端午の節句のはじまり

元々日本では端午の節句は女の子のお祭りでした。日本には田植えを始めるシーズンである5月、早乙女(さおとめ)と呼ばれる若い女性たちは、「五月忌み」といって田の神様のために仮小屋や神社などにもこもって身の穢れを祓う習慣がありました。この日は田の神様に対する女性の厄祓いの日だったのです。

一方、古代中国には重五という邪氣祓いの行事があり、当時邪気を祓う作用があると考えられていた菖蒲やよもぎ、葉草などを野に出て摘んだり、よもぎで作った人形を飾ったり、菖蒲酒を飲んだりして健康を祈りました。

これらの習慣が結びつき、日本でも飛鳥時代に端午の節句が生まれました。中国と同様、日本でも菖蒲の薬効と香りは穢れを祓うとされ、厄除けとして使われるようになりました。そのためこの頃に軒に菖蒲を吊るしたり、菖蒲の葉を浮かべたお風呂(菖蒲湯)に入ったりするなど、現在の風習にも通じる習慣が定着しました。

これが男の子のお祭りになるのは、武士が台頭してくる平安時代以降になります。鎌倉時代には宮中より武家社会へ節句が伝わり、『武を尊ぶ』という意味合いから引き続き菖蒲を使用しました。

江戸時代には、菖蒲が「尚武」「勝負」に通じること、また菖蒲の葉が鋭い剣の形を連想させることから、男の子の健やかな成長、立身出世を願う行事となり、兜などの武器を飾り、のぼりや吹流しを立てるようになり、男の子の成長を祝う行事に変わっていきました。鯉のぼりを立てるようになったのは、武者人形を家の中で飾るようになり、また、中国の「龍門を登って鯉が龍になった」という故事にあやかっただけです。

これらの風習は徐々に庶民にも広まり、五節句のひとつとして式日に定められ、公式の行事を行うようになりました。

この行事が「こどもの日」と制定されたのは昭和23年です。
(葉)菖蒲と花菖蒲

菖蒲湯に使う菖蒲はサトイモ科の植物で、花き市場では葉菖蒲と呼んでいます。古く中国で使われていたのがこれで、花はガマの穂のように細長く地味ですが、葉には独特の芳香があります。この芳香が強いことから、菖蒲は邪気を祓う植物とされました。それだけではなく、菖蒲は葉草としての効能もあり、昔から葉を煎じて腹痛や打ち身の患部に治療薬として用いていました。根は漢方薬として使われ、胃薬や解熱・ひきつけ・創傷の薬にもなりました。そのことから、5月5日に無病息災を念じて菖蒲湯に入るようになったと言われます。



やがて、お湯に浸かった柔らかい葉を頭に巻くと頭が良くなる、お腹の周りに巻くと病気をしないなどとまで言われるようになり、現在では端午の節句が近づくスーパーなどで菖蒲湯用の菖蒲が販売されているのをよく見かけるようになりました。

一方、花菖蒲は梅雨の頃の代表的な花の一つです。アヤメ科で、紫や赤紫色、黄色や白の大きな花を咲かせます。葉が菖蒲に似ていて、美しい花を咲かせることから花菖蒲と呼ばれるようになりました。五月人形のそばに飾るのはこの花です。ちなみに花菖蒲は英語でSword-leaved iris(剣のような葉のアイリス)と言います。

柏餅

「柏餅」は、柏の木が若い芽が出ないと古い葉が落ちないことから、後継ぎが絶えないようにと好んで使われます。

「粽(ちまき)」は中国戦国時代の忠臣であり詩人もあった屈原(くつげん)が5月5日に川に身を投じ手死んだことを人々が悲しみ、毎年命日には竹の筒に米を入れたもので供養したことが起源となっています。ある年、供養のときに屈原の霊が現れ、「米を龍に取られてしまうので、竹筒ではなく龍が嫌がる茅(ちがや)で包み、糸で結んでほしい」と言ったことから、今の形になったと言われています。

粽は、餅米やうるち米などの米を水で練り、茅の葉は笹や菖蒲の葉で代用され、包んで蒸します。「粽」の名称は、以前茅の葉などで巻いたことから「茅巻(ちまき)」というようになったことに由来します。